

頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム 2011 年度派遣報告書  
派遣期間 2011 年 6 月 16 日—12 月 16 日  
派遣先 仏領ポリネシア（タヒチ・ルルツ）、チリ領イースター島（ラパヌイ）

京都大学大学院・アジア・アフリカ地域研究研究科  
東南アジア地域研究専攻  
特別研究員(PD)  
西本 希呼

## 1. 研究テーマ

報告者は、大学院博士課程在籍時から継続して、マダガスカル語の諸方言を中心としたオーストロネシア諸語の言語研究に携わっている。2011 年度から、新たに、ポリネシア地域へと視野を向け、調査・研究対象を広げる運びとなった。仏領ポリネシアのソシエテ諸島に位置するタヒチ島、オーストラル諸島に位置するルルツ島およびチリ領ラパヌイ島（イースター島）へそれぞれ 3 か月ずつの現地調査に赴いた。マダガスカル語、タヒチ語、ルルツ語、ラパヌイ語は、オーストロネシア語族の中でも、西部マレー・ポリネシア語群<sup>1</sup>（マダガスカル語）、オセアニア諸語東部ポリネシア語群（タヒチ語、ルルツ語、ラパヌイ語）と、下位分類が異なる。そのうち、ルルツ語・タヒチ語およびラパヌイ語は東部ポリネシア語群の中でもポリネシア祖語からの分離がもっとも最近であるとされている言語である(Lynch 1998)。

報告者の主な目的と関心事は、言語調査を基盤とした、オーストロネシア語圏における、比較言語学的研究および、同地域間の固有の植物や天体運動や季節の推移などの自然認識や自然資源利用の体系を明らかにしていくことである。ルルツ島、ラパヌイ島でそれぞれ、言語調査および植物と人に関わる調査を行った。以下、順を追って報告する。

## 2. 派遣の内容

### 2.1 仏領ポリネシア（タヒチ・ルルツ）

仏領ポリネシアは、ソシエテ諸島、ツアモツ諸島、オーストラル諸島、ガンビア諸島、マルケサス諸島の 5 つの諸島からなり、294,935 人（CIA 2011）の人口を有し、ポリネ

---

<sup>1</sup>西部マレー・ポリネシア諸語という下位分類は推定の域を超えず、言語学的に証明された分類ではない(Adelaar 1995)が、オーストロネシア諸語研究では、他の下位分類に属さず、かつ、分類が未解明な言語をオーストロネシア諸語研究では慣習的に西部マレー・ポリネシア諸語と呼んでいる(Blust 1996)。

シア系 78%、中国系 12%、土着のフランス人が 6%、本国フランスのフランス人 4%で構成される。ソシエテ諸島で主に話されているタヒチ語が、本国の言語であるフランス語に並び、公用語の地位を持つ。報告者が主として調査対象とした言語は、オーストラル諸島のルルツ島である。ルルツ語はルルツ島民約 2000 人(Guillin 2001)に話されている言語である。

## 2.2 ルルツ語の記述研究を開始

### 2.2.1 社会言語学的背景

ラジオやテレビをはじめとするメディアの普及と交通網の発達により、タヒチ語の放送や、ソシエテ諸島からの出入りする人々との交流が近年飛躍的に増加し、ルルツ語は、仏領ポリネシア全般の公用語であるタヒチ語の影響を強く受け、消滅の危機に瀕する言語の一つである。初等教育では本国の言語であり公用語であるフランス語と、タヒチ語が教えられる。ルルツ島の現地語であるルルツ語が、現地語(Reo mao'i)科目として週に数時間ほど教えられる。初等教育から高等教育まで、授業はフランス語で行われる。

観察および聞き取り調査によると、50 歳代以上の世代はルルツ語の知識が豊富で、ルルツ語のモノリンガル話者の数が目立つ。30 代から 40 代は、ルルツ語、フランス語のバイリンガル、10 代後半から 20 代はルルツ語の知識はあるものの、フランス語での会話が大半を占める。15 歳未満の子供のルルツ語の知識は極めて受動的で、ルルツ島固有の文化語彙や特定の果物、海産物の名前に限られ、子ども同士の日常会話はフランス語である。

### 2.2.2 ルルツ語の調査

ルルツ島生まれの女性 T 氏とその家族の協力を得て、3 か月間、基礎語彙、人称代名詞の体系、人称代名詞の数体系、所有人称代名詞の譲渡可能(alienable)形と不可能(inalienable)形およびその意味範疇、数詞、助数詞、動詞の重複形、形容詞の重複形、名詞の接辞化、動詞の受動態と能動態、使役動詞に関するデータなどを集めた。最後に民話を録音し、インフォーマントの協力を得て、録音と文字化し対訳を行った。また、現地滞在中は、植物やその現地利用の観察を行った。本報告ではすべてを書ききれないため、所有人称代名詞、重複形、ルルツ島の人々と自然について、概括する。

### 2.2.1 タヒチ語との比較

ルルツ語とタヒチ語との間には、[ʔ]対[f]、[ʔ]対[h]の規則的な音対応が観察される(表 1 参照)。

表 1 ルルツ語とタヒチ語の比較

| 意味   | ルルツ語    | タヒチ語     |
|------|---------|----------|
| 家    | ʔare    | fare     |
| 親族   | etiʔi   | fetiʔi   |
| 聞く   | aroʔoʔo | faroʔoʔo |
| ヤシの実 | aʔari   | haʔari   |

|    |            |          |
|----|------------|----------|
|    | *nia とも言う。 |          |
| 毛  | uru?uru    | huruhuru |
| 女性 | va?ine     | vahine   |

### 2.2.2 所有人称代名詞

多くのポリネシア諸語と同様、ルルツ語の人称代名詞は数体系、所有関係、包括形/除外形など、複雑な体系をもつ。ここでは、主に所有人称代名詞を取り上げる。所有人称代名詞には、譲渡可能/不可能(alienable/inalienable)の 2 つの範疇がある。譲渡可能か不可能かは、所有者と所有物との関係で決まり、一般的に、所有者に従属し、所有者から切り離せない存在のものは譲渡不可能、切り離せるものを譲渡可能と区別する。表 2 ではルルツ語の所有人称代名詞を太字で示した。

表 2 ルルツ語の所有人称代名詞

|        | 譲渡不可能                              | 譲渡可能                             |
|--------|------------------------------------|----------------------------------|
| 1 人称単数 | <b>to?u</b> pa?o (my head)         | <b>ta?u</b> ei?a (my fish)       |
| 2 人称単数 | <b>to?oe</b> pa?o (your head)      | <b>ta?oe</b> ei?a (your fish)    |
| 3 人称単数 | <b>to na</b> pa'o (his/her head)   | <b>ta na</b> ei'a (his/her fish) |
| 1 人称双数 |                                    |                                  |
| 包括形    | <b>to taua</b> pa?o (our head)     | <b>ta taua</b> ei?a (our fish)   |
| 除外形    | <b>to maua</b> pa'o (our head)     | <b>ta maua</b> ei'a (our fish)   |
| 1 人称複数 |                                    |                                  |
| 包括形    | <b>to tatou</b> pa?o (our head)    | <b>ta tatou</b> ei?a (our fish)  |
| 除外形    | <b>to matou</b> pa?o (our head)    | <b>ta matou</b> ei'a (our fish)  |
| 2 人称双数 | <b>to orua</b> pa?o                | <b>ta orua</b> ei?a              |
| 2 人称複数 | <b>to outou</b> pa?o (your head)   | <b>ta outou</b> ei?a (your fish) |
| 3 人称複数 | <b>to ratou</b> puoko (their head) | <b>ta ratou</b> ika (their fish) |

傾向としては、身体部位名称、身体の装着するもの（メガネ、服、帽子等）、移動手段（船、車）などは譲渡不可能の所有人称代名詞がつき、それ以外の食べ物、抽象名詞、物質名詞などは譲渡可能のカテゴリーとなり、所有人称代名詞がつく。また、親族名称や、「家」「親」「ベッド」など所有者と所有物との関係によって、譲渡可能か不可能か使い分けられる語彙項目もある。

### 2.2.3 重複形

ルルツ語は、名詞、動詞、形容詞を重複することができる。語形成の中で、もっとも生産的である。主に、重複することで、元の語から意味が変化する、複数形（双数もしくは複数）を表す、もしくは複数の人が行動に関与することを表す、反復を表す、語気

を緩和する、などの役割がある。重複には、語基の一部を重複する部分重複と、語基すべてを重複する完全重複の 2 種がある。表 3 に動詞の重複形の例を示した。

表 3 ルルツ語の動詞の重複形

| 語基           | 意味    | 重複形       | 意味       |
|--------------|-------|-----------|----------|
| <b>mato</b>  | 殴る    | matomato  | 2 人が殴りあう |
| <b>ere</b>   | 愛する   | ere?ere   | 2 人が愛し合う |
| <b>ori</b>   | 踊る    | oriori    | 皆で踊る     |
| <b>inu</b>   | 飲む    | inuinu    | 大勢の人と飲む  |
| <b>ata</b>   | 笑う    | ata?ata   | いつも笑っている |
| <b>imene</b> | 歌う    | imenemene | 鼻歌を歌う    |
| <b>po?ia</b> | お腹がすく | popo?ia   | 小腹がすく    |

#### 2.2.4 人々と自然

クジラを見るために時折訪れる観光客を除けば、ルルツ島は、海と山に囲まれた、自然豊かな静かな島である。テレビやインターネットが村に普及したのは、つい最近のことで、ルルツ島の暮らしは、ここ 20 年で大きく変わったといわれている。農産物の豊かな肥沃な土地で、人々は 1 年中食糧に恵まれた生活を送っている。海辺では、貝やウニやナマコを採集し、投げ縄により魚を取る。庭では、ココヤシの木、バナナ、パパイヤ、グレープフルーツ、オレンジ、パイナップル、グアバなど栽培し、また多くの家庭では豚を飼育している。

特に、タロイモの栽培や収穫はルルツ島民のアイデンティティに係る事柄で、昔から今まで受け継がれている農耕文化である。かつては、タロイモ泥棒は、死刑に値する罪だとも言われていた。満月の日にタロイモを植える。満月のように大きなタロイモが育つことを願うためである。7 月の祭りでは、車や家を島で収穫されるタロイモ、グレープフルーツなどの果物野菜で装飾した車が、踊り子を連れて広場にあつまるといわれている。表 4 ではルルツ島にみられる植物とその利用の一端を紹介する。

表 4 ルルツ島の植物と現地での利用例

| ルルツ語                            | 学名                                        | 利用法                                                                 |
|---------------------------------|-------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|
| <b>noni, nono</b>               | Morinda citrifolia L.<br>(和名: ノニ、ヤエヤマアオキ) | 多目的で、実をつぶしてバナナと混ぜたジュースは、店頭にも売られ、重労働やスポーツの後に飲まれる。他、腹痛、癌の治療薬として用いられる。 |
| <b>Tiare Tahiti<sup>2</sup></b> | Gardenia taitensis                        | 女性のおしゃれとして耳に飾                                                       |

<sup>2</sup> tiare tahiti (タヒチの花)という名だがバヌアツ島が起源と言われている(Whistler 2009)。

|      |                       |                                                                                                                                   |
|------|-----------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|      | (和名：タヒチアン・ガーデニア)      | る。<br>花輪を作るときに使う。<br>頭痛、鼻炎の治療薬として用いる。                                                                                             |
| fara | Pandanus<br>(和名：タコノキ) | マット、帽子、かごなど、編み物の素材となる。ルルツ島の主要産物。<br>実は香り豊で、装飾用の花輪のほか、石鹸やココナッツオイルの香料に用いられる。<br>花は hinano という名で、女の子の名前に使われる。また、タヒチ名産のビールのブランド名でもある。 |

写真 1 pandanus (タコノキ) で作った帽子、ポリネシアで、歓送迎の際に渡す花輪、貝のネックレス。



写真 2 Tania 氏に pandanus で作ってもらったボトルケース



写真 3 タロイモやバナナの葉などで装飾された車、7月祭りの開催式にて



## 2.3 ラパヌイ（チリ領イースター島）

ラパヌイはポリネシア諸島の東果てに位置する面積約 160 km<sup>2</sup>の火山島である。1888 年からチリ領となった。タヒチから約 4000km、チリ沿岸から約 3700km 離れた孤島である。ラパヌイから 2000km 離れたピトケルン島（イギリス領）が一番近い有人島である。この小さな孤島に、今は消滅したロンゴロンゴ文字をはじめ、モアイ像、ラパヌイ語、鳥人儀礼など、考古学者、民族学者、言語学者、そして観光客を魅了する文化や世界遺産があり、ラパヌイ島のハンガロア村の大通りには、民宿とレストランが並び外国人観光客でにぎわっている。ラパヌイ語は生きた言語であり、ラパヌイ出身の子どもも大人もラパヌイ語を話す、教育はスペイン語で行われること、チリからの移住者が増加し、チリ出身の人との交流がスペイン語であることから、スペイン語が支配的な地位にある。しかし、村から 10 分ほど離れた田舎へ行くと、ラパヌイ語の会話が日常的に聞こえてくる。

### 2.3.1 Rapa Nui という名称

イースター島(スペイン語では Isla de Pascua)を、ポリネシアの人々はイースター島という名は使わず、Rapa Nui（ラパヌイ）と呼ばれている。また、Te pito o henua（地球のへそ）という別名も持つ。タヒチの国際空港の行先表示にも Rapa Nui（もしくは Isla de Pascua）と表記され、チェックインカウンターでも、行先を Rapa Nui とつける。ラパヌイでも島、人、言語をそれぞれ、ラパヌイ、ラパヌイ人、ラパヌイ語と呼ばれている(一般的に地域名を指す場合は Rapa Nui、人や言語を指す場合は Rapanui と書かれる)。Rapa はタヒチ語で「島」もしくは「平地」、Nui は「大きい」という意味である。仏領ポリネシアのオーストラル諸島の南端に位置する小さな孤島 Rapa（面積約 40 km<sup>2</sup>、人口は約 480 人、Rapa Iti「小さな Rapa」とも呼ばれる）と対比して、Rapa Nui「大きな Rapa」

と呼んだのが起源である(Michel 1993、Ojeda 1947、Make and Chasarian 2008)。

### 2.3.3 ラパヌイ語の調査

ルルツ語やタヒチ語の知識は、ラパヌイ語を調査するにあたって、大変よい足がかりとなった。曜日名をはじめ、タヒチ語からの借用語が多くみられ、店やレストランの名前も、タヒチ語の看板が垣間見られる。ラパヌイ語の調査は、当初は、博物館や図書館での資料収集や、書店での書記媒体の資料収集に重点を置いた。後半は、インフォーマントの協力を得て、基礎語彙の調査および植物語彙と現地での植物利用に関する情報を集めた。ラパヌイ語には、果物名や野菜名は豊富で、グアバやパパイヤなど個別の名称はあるが、「果物」、「植物」、「野菜」、「豆」などの集合名詞があまりみられない。動物、虫についても鳥を意味する *manu* があてられる。一方、ラパヌイ語では月齢の語彙が体系的で、暦法として今も生きている。2.2 のルルツ語の記述で所有人称代名詞を取り扱ったので、比較のため、ここでは、ラパヌイ語の所有人称代名詞について述べる。ラパヌイ語は、単数形に、譲渡可能/不可能(*alienable/inalienable*)の区別がみられ、双数形と複数形には区別がない。表 5 では、所有人称代名詞を太字で示した。譲渡可能/不可能の意味範疇にまでは、深く踏み込んだ調査を今年には行えなかったため、今後の課題とする。ルルツ語と同様、身体部位の語彙、移動手段を表す語彙は譲渡不可能、食べ物や物質名詞、抽象名詞は譲渡可能の所有人称代名詞がつく傾向がある。表 5 にラパヌイ語の所有人称代名詞を太字で示した。

表 5 ラパヌイ語の所有人称代名詞

|        | 譲渡不可能                              | 譲渡可能                             |
|--------|------------------------------------|----------------------------------|
| 1 人称単数 | <b>to?oku</b> puoko (my head)      | <b>ta?aku</b> ika (my fish)      |
| 2 人称単数 | <b>to?u</b> puoko (your head)      | <b>ta?a</b> ika (your fish)      |
| 3 人称単数 | <b>to?ona</b> puoko (his/her head) | <b>ta?ana</b> ika (his/her fish) |
| 1 人称双数 |                                    |                                  |
| 包括形    | <b>taua</b> puoko (our head)       | <b>taua</b> ika (our fish)       |
| 除外形    | <b>maua</b> puoko (our head)       | <b>maua</b> ika (our fish)       |
| 1 人称複数 |                                    |                                  |
| 包括形    | <b>tatou</b> puoko (our head)      | <b>tatou</b> ika (our fish)      |
| 除外形    | <b>matou</b> puoko (our head)      | <b>matou</b> ika (our fish)      |
| 2 人称複数 | <b>korua</b> puoko (your head)     | <b>korua</b> ika (your fish)     |
| 3 人称複数 | <b>raua</b> puoko (their head)     | <b>raua</b> ika (their fish)     |



#### 2.3.4 あやとり言語 kai kai

日本では、あやとりとして親しまれている遊びを、ラパヌイで見ることができた。ラパヌイでは、あやとりはメッセージを伝える手段であり、kai kai と呼ばれている。本稿では「あやとり言語」と呼ぶ。あやとり言語は、歌や伝説を伝える、今も生きた文化であり、言語である。日本のあやとりにもそっくりであった。日本との違いは、あやとりに相手が参加して、ひもをとることはない。あやとりで次々と船や海などを表現し、リズム感のある言葉で、物語を語るのである。今年の調査では、あやとり言語を書きおこし、分析するまでには至らなかったが、今後は是非取り上げたい興味深いテーマである。



写真 4 kai kai で民話を語るインフォーマントの R. Pakarati Araki 氏

#### 2.3.5 人々と自然

##### (1) 自然環境問題およびその取組

ラパヌイ島への入国の際の手荷物検査は厳格で、スーツケースや鞆はもちろんのこと、造花の髪飾りまで X 線検査にかけられた。(一方、出国時は、一切の手荷物検査がなかったことは印象的である。) この島は、外来種による生態系の変化や環境破壊が著しいためである。

島全体の海岸沿いには美しい黄色い花を結ぶ低木 *Cytisus scoparius*(エニシダ)で覆われている。この植物は、繁殖力の非常に高く、生態系を破壊する外来種である。道路沿いには、アフリカ大陸が原産とされる、赤い花を咲かす落葉高木 *Erythrina variegata*(デイゴ)が満開である。家の前に栽培されている色とりどりの花を咲かす *Nasturtium* (ナスターチウム)は、ラパヌイの象徴の花として親しまれている。このように、モアイ象だけでなく、花と植物だけでも見所の多い島ではあるが、多くが外来種である。

ポリネシア系の人々が到着するまでは、島全体がラパヌイ固有種の椰子の木(*Jubaea* sp., 絶滅種)で覆われていた(Hunt and Lipo 2007, Mieth and Bork 2009)。また、かつては、在来種であるトロミロの樹木が生い茂っていたと言われている(Hunt 2006)。しかしながら、モアイ象の建築や運搬、燃料としての使用、家やカヌーの建築、自然への人為的介



入、人口増加、過度の都市開発などが原因で森林は破壊され、現在は、島の大部分は草地や火山からの溶岩、上述の外来植物に覆われている。また、ポリネシア系民族が上陸した際に、ネズミ(*Rattus exulans*)と鶏(*Gallus gallus*)がこの島に持ち運ばれた(2007a, 2007b)。自然破壊の原因として、その外来種のネズミによる種子の捕食により、植生の破壊を招いたとする説(Hunt 2006)と、ネズミによる影響より人為的な介入が生態系の変化や森林破壊に与えた影響が大きいとする説(Mieth and Bork 2010)がある。

現在は、国立森林組合が中心となって、島固有種のToromiro (*Sophora Toromiro*)の保存と将来の森林回復を目標に取り組んでいる。この木は、気温の変化や害虫に弱く脆弱な植物で、かつ、大木に育つには50年以上もの年月がかかるため、長期戦である。国立森林組合はmanavai(「mana」は魂、神聖な力、魔力)を意味する、vaiは「水」という岩で囲い苗木を保護し、様々な実験でToromiroの発育を増進する方法を研究している。子ども向けのミュージカルでは、「トロミロの木」(スペイン語: *Árbol Toromiro*)というトロミロの木の豊穡を願う歌があり、「トロミロの木を植えよう、島に森林を取り戻そう<sup>3</sup>」と次世代の子どもに森林の大切さを伝えている。歴史の中で人間の恣意的な営みと言える、自然への人為的な介入により引き起こされた森林破壊を、今、何世代もかけて、回復しようと島全体をあげて努力している。

## (2) 植物利用

今日においても、植物を利用した伝統医療は生きている。病院へ行くと、患者は、西洋医学による治療を受けるか、伝統医療による治療を受けるか患者の意思で選択する。国立森林組合のスタッフが、『西洋医学による治療を受け、余命があと半年と病院で告知された友人が、癌の治療薬に効くといわれている *matu? a pua? a* を飲み続けたところ、元気になり、今も元気に生きているのだよ』と感慨深く語っていたのが印象的である。滞在先の民宿では、バイク事故で怪我したチリ人観光客の傷口を、たくさんの水で冷やしたバナナの葉をあてて冷やしていた。辺境に位置する小さな島では、手に入る物資は限られ、どれも輸送コストがかかるため高額である。庭で栽培している植物や、道端に生えている草木の全てが、彼らには貴重であり、有効な生活技術なのだ。表6に、インフォーマントの女性(植物学が専門)および国立森林組合のスタッフから得た情報の一部を示した。

表6 ラパヌイの植物利用例

| ラパヌイ語 | 学名 | 利用法 |
|-------|----|-----|
|-------|----|-----|

<sup>3</sup> Voy a plantar un Toromiro, este árbol quiero rescatar. Los han cortado casi todos. <中略>...¡Vamos a reforestar y al Toromiro salvar! (報告者訳: トロミロの木を植えよう、この木を回復させよう。この木はほとんど全部伐採されてしまった。森林を回復して、トロミロの木を救う!) 出典 *Árbol Toromiro*, Fariña and Aránguiz, Radioteatro musical Infantil Rapanui.

|                     |                                                       |                                     |
|---------------------|-------------------------------------------------------|-------------------------------------|
| <b>miro tahiti</b>  | Melia azederach<br>(和名：センダン)                          | 葉をすりつぶし、擦り傷や皮膚のアレルギーの治療薬として用いられる。   |
| <b>matuʔa puaʔa</b> | Polypodium scolopendria<br>(和名：ウラボシ科オキナ<br>ワウラボシ属のシダ) | 喘息、頭痛、癌の治療薬、滋養剤                     |
| <b>tuava</b>        | Psidium guajava L<br>(和名：グァバ)                         | 腹痛、咳の治療薬、グァバの実は生食のほか、ジュースやジャムに加工する。 |
| <b>popora</b>       | Solanum fosteri<br>(和名：ポポラ)                           | 腹痛の治療薬<br>*ラパヌイ固有種                  |
| <b>mahute</b>       | Broussonetia papurifora<br>(和名：梶の木)                   | 衣服、紙を作る                             |
| <b>tipanie</b>      | Plumeria<br>(和名：プルメリア)                                | 花を装飾として用いる                          |
| <b>toromiro</b>     | Sophora Toromiro<br>(和名：トロミロ)                         | 島の固有種で現在、国立森林組合を中心に大切に育てられている。      |

### (3)馬の役割

ルルツ語やラパヌイ語で、犬や牛をはじめとする動物は、譲渡可能の人称代名詞がつく一方、馬は譲渡不可能の人称代名詞がつく。ルルツ島では、なぜ牛が譲渡可能で馬が譲渡不可能なのか、にわかには理解できなかった。ルルツ島では、車が広く普及し、馬は人間の足としては今日ではほとんど機能せず、伝統祭りでの馬乗り競争や、観光客向けの乗馬としてごくたまに道で見かけるのみであった。

しかし、ラパヌイ島で、彼らの暮らしからラパヌイ人にとっての馬の価値や役割がどれほど重要か理解した。馬は、人間の足として、今も貴重な存在なのである。馬の散歩や人間の散歩はもちろんのこと、近所へのちょっとした買い物や、友達の家を訪問する際にも馬にのって出かける。馬を 30 頭以上飼っている 40 代の男性は、馬を飼う理由は、「馬が大好きだからだ」と言う。ラパヌイ出身の各家庭のほとんどが馬を所有している。車が移動手段として導入され、庶民の手の届くところへ普及したのは、つい最近のことである。人間の足のみならず、土地を耕したり、馬に踏ませて除草するなど、農作業に重要な役割を果たす。



写真 5 畑経営者の所有する家畜の馬

### 2.3.6 語彙の対応 Tandroy, Merina, Malay, Tahiti, Rurutu, Rapanui

これまで私が主に携わってきたマダガスカル語 Tandroy 方言、Merina 方言および、今年のポリネシア地域での調査を反映した祖語を同じくする語彙の対応表を表 7 に示す。例えばヤム芋を表す語をみると、マダガスカル語 Tandroy 方言、Merina 方言、マレー語、タヒチ語、ルルツ語、ラパヌイ語では、[v]-[v]-[b]-[f]-[ʔ]-[h] の音の対応が見られる。[v]-[b]-[ʔ]-[h] の対応は、「毛」を表すマダガスカル語 Tandroy 方言、Merina 方言、マレー語、ルルツ語も同様である。また、マダガスカル語では「暑い」を意味する語が、ポリネシアのタヒチ語やルルツ語では、「太陽」を意味する語に対応している。「目」はマダガスカル語以外は共通、「死」は表の中ではマダガスカル語 Merina 方言とマレー語以外の全ての言語で共通である。これらの言語は、確かに同じ祖語から分岐した言語であることが、表 7 の語彙の対応から明らかである。

表 7 Tandroy, Merina, Malay, Tahiti, Rurutu, Rapanui の語彙の比較

|     | Tandroy<br>(Malagasy) | Merina<br>(Malagasy) | Malay *1   | Tahiti           | Rurutu           | Rapanui  |
|-----|-----------------------|----------------------|------------|------------------|------------------|----------|
|     | 西部マレー・ポリネシア語群         |                      | マレー・スンバワ語群 | オセアニア諸語東部ポリネシア語群 |                  |          |
| 空   | lanitse               | lanitra              | langit     | raʔi             | raʔi             | rangi    |
| 人   | uluŋe                 | uluna                | orang      | taʔata           | taʔata           | taŋata   |
| 子ども | anake                 | zanaka               | anak       | tamariʔi         | tamariʔi         | poki     |
| 魚   | fia                   | trundru              | ikang      | iʔa              | eiʔa             | ika      |
| ヤム芋 | uvi*2                 | uvi*2                | ubi        | ufi              | uʔi              | uhi      |
| 目   | masu *3               | masu*3               | mata       | mata             | mata             | mata     |
| 毛   | vulu                  | vulu                 | bulu       | huruuru          | uruʔuru          | huruhuru |
| 死   | mate                  | mati                 | mati       | mate             | mate             | mate     |
| 暑い  | mafana                | mafana               | hangat     | mahanahana<br>*4 | maʔanaʔana<br>*5 | mahana*6 |
| 怖い  | matahutse             | matahutra            | takut      | matahu           | mata'u           | mataku   |
| 5   | dime                  | dimi                 | lima       | rima*7           | rima*7           | rima*7   |

\*1 マレー語の資料は Board of Scholars, University of Penang, Malaysia. 1992. English-Malay, Malay-English dictionary, Language of the world publications, India. を参照した。

- \*2. 意味は「ジャガイモ」。
- \*3. マダガスカル語の masu はスワヒリ語の macho が起源(Tryon 1995)。
- \*4. mahana「太陽」の重複形。
- \*5. maʔana「太陽」の重複形。
- \*6. cf. 「太陽」は rāʔa。
- \*7. 意味は「手」。

### 3. 派遣中に印象に残った経験

#### 3.1「ウナギ」を通じた人との交流

フィールドワークでは、現地の人々との気長な付き合いや、日常の世間話にさく時間が非常に多い。現地の人々との信頼関係を築くことは、現地調査で、有用な資料を集めるために欠かせない重要な課題である。ルルツ島では、ある日は、10 歳未満の子どもたちと、一日中海辺の魚を観察し、ラパヌイ島では、朝から夜 22 時ころまで豆やグァバの収穫を手伝った。このような息の長い時間を経て、現地の人々との絆が高まることで、研究者-協力者という関係を越えた、人間としてのつきあいが深まり、結果的には相互に友好的な研究協力関係が生まれる。そうしたやりとりの中に、新しい発見や、興味あるトピック、研究のアイデアが生まれる。ここでは、ルルツ島、ラパヌイ島において、世間話で特に現地で盛り上がった、「ウナギ」について述べる。

##### 3.1.1 ウナギを食す習慣のないルルツ島民

ルルツ島のタロイモ畑には、ウナギがいっぱい泳いでいるという話を聞き、日本人はウナギを食べる、高級な食べ物だと、言ったところ、ルルツ島民は驚きを隠さなかった。タロイモ畑にウナギが山ほどいるので、採って一度食べてみようということになった。タロイモ畑で、食べるためにウナギを捕まえる光景も、ウナギを持ち帰り裁く光景も、現地の人には興味深々で、注目の的となった。ウナギを食べたのは私だけで、私がルルツ島の家庭で犬の丸焼きを食べることができなかったのと同様、周りで騒いで見ていた子どもたちも、ウナギの味見をすることはなかった。

インフォーマントの話によると、かつて、「ウナギを捕獲すると、畑に水がなくなるから、石を投げたり、いじわるをするのはよくない、ウナギがいるおかげで畑に水が恵む」と親から教わったらしい。ルルツ島には川がなく、海水から田畑に水を引いている。

写真 6 タロイモ畑でのウナギ採り



写真 7 初めてウナギ裁きに挑戦





### 3.1.2 ウナギが大好物のラパヌイ島民

ルルツ島とは対照的に、ラパヌイでは、ウナギの話をした瞬間に、「ウナギの味のわかる君は、我が心の友よ」と、大歓迎され、友好関係が一瞬にして強まった。ウナギが好物で、家庭料理の一つであるが、村のレストランでは見ることはない。西洋人をはじめとする観光客が一般にウナギを食べないためだという。フライ、スープ、揚げ物、刺身など様々な食べ方があり、ウナギを見つけると必ず捕獲して、冷凍庫に貯蓄するそう。たまたま出会った村人は、皆ウナギを冷凍庫に入れていたと言っていた。次回、ポリネシアで調査をする際は、ウナギを上手にさばき、日本風の味付けをできるように準備しておかなければならない。

写真 8 ラパヌイでのウナギスープ



## 4. 目的の達成度・反省点

前半3か月の仏領ポリネシア・ルルツ島での調査は大変有意義であった。母音の長短や、アクセントの位置など、細かな疑問点は多く残る。時間の許す限り、精一杯の調査を行ったが、統語論的側面の調査は追いつかなかった。植物と自然利用に関しても、植物名の同定と現地名を得ることはできたが、詳しい利用法や資料はまだ不十分である。今後さらなる再調査が必要ではあるが、短期間でかなり網羅的な資料を集めることができた。ルルツ島を含めるオーストラル諸島の言語の研究はほとんどなく、遠方のラパ島を含め、オーストラル諸島の言語研究に関心が高まり、長期戦ではあるが、今後の私の研究の対象としたいと思う。

後半3か月のラパヌイは、初めての南米大陸と接点を持ち、戸惑いを隠せなかった。

ずいぶん遠くへ来たという印象が強く、ラパヌイに浸透している南米文化に慣れるのに時間がかかり、調査開始には時間がかかった。ラパヌイの本国チリの言語であるスペイン語の中に南米大陸の現地語ケチュア語の語彙が入っていること、ラパヌイで話されている南米スペイン語のラパヌイ語の影響や、チリ出身の移住者が話す南米スペイン語とスペインのスペイン語との違いなど、私の本来の研究とは関係ないトピックではあるが、関心領域や視野が広がったように思う。

西の果てのマダガスカル言語と東の果てのイースター島の言語が同じ祖語から分岐した同系統の言語であることは、周知の事実で、当然ながら私も既に基礎知識として得ていた。しかし、実際に祖先が移動し拡散した人類移動の軌跡をたどり、調査をすることで、確かに祖語を同じくする言語であることを体感し、言語の共通性を観察できたことは、研究上大変貴重な経験となった。

## 5. 今後の課題

博士課程までの研究対象地域であるマダガスカル、学会発表や短期調査で訪問したマレーシアやインドネシアに加え、今年度の派遣で可能となった、仏領ポリネシアとラパヌイ（イースター島）でのフィールドワークを通じて、オーストロネシア語圏の西果てから東の果てまで一度足を運びたいという夢がかなった。6か月のポリネシアでの現地調査の期間に、タヒチには梶茂樹先生が言語調査の指導に、ラパヌイ（イースター島）には、水野一晴先生が自然地理学的視点での指導に赴いてくださった。

今後の課題は、(i) 今回採集した一次資料を分析し、最終的にはオーストロネシア語間、オセアニア諸語間の間での言語を比較し、類縁関係を探ってゆくための下準備を整えること、(ii) 次回の現地調査では、海洋文化特有の航海技術、植物や天然資源、海産物の語彙とその現地利用に目を向け、自然地理学的な分析や、オーストロネシア語圏の地域間の比較にも耐える精度をそなえた民族植物学的記述をおこなうことである。

2011年12月末から2012年3月末までは、フランス国立東洋言語文化研究所(INALCO)に客員研究員として3か月間滞在することになっている。専門家やフランス在住のマダガスカル人との意見交換を行い、博士論文(A Descriptive Study of Tandroy dialect of Malagasy)の議論が不十分なところを補い、インド洋地域研究、オセアニア言語学関連の研究者との交流やセミナーを通じて研鑽を積み、研究をよりいっそう深化させたい。

## 謝辞

ポリネシアでの学術調査は、ポリネシアの島々の人々の心のこもったおもてなしと、研究への理解と協力なしでは、達成し得ませんでした。ルルツ語の調査を毎日手伝って下さった Tania 氏とご家族、ラパヌイ語の調査を熱心に支援して下さいました Pakarati 家の親族および国立森林組合の皆様に深く感謝いたします。また、タヒチでは、親切に現地での研究に関する情報を提供して下さいました Cibart Frederic 氏にお礼申し上げます。日



本からは、ご多忙の中、遠方よりはるばる梶先生と水野先生が現地まで指導に来ていただき、思慮深く有益な助言をいただき、ありがとうございました。また、このたびの調査は、辺境の離島という地政学的事情より、物価が非常に高い島々であるため、日本学術振興会の財政援助なしでは、到底かないませんでした。寛大な財政的援助および、資金の管理や便宜を図って下さった ASAFAS の事務方のご厚意に対して、ここに感謝の意を表します。

## 引用文献

- Adelaar, A. (2005). The Austronesian languages of Asia and Madagascar: A historical perspective, in Adelaar A. and Himmelman N.P. (eds), The Austronesian languages of Asian and Madagascar.
- Blust, R.A.(1999). Subgrouping, circularity and extinction: some issues in Austronesian comparative linguistics, in E.Zeitoun and P.J.K.Li (eds), Selected papers from the Eighth International Conference on Austronesian Linguistics: 31-94.
- Guillin, Jean, (2001), L'archipel des Australes, Édition A.Bathélemy & Le Motu.
- Hunt, Terry.L. (2007a). Rethinking Easter Island's ecological catastrophe, Journal of Archaeological Science 34, 485-502.
- Hunt, Terry.L. (2007b). Chronology, deforestation, and "collapse:" Evidence vs. faith in Rapa Nui prehistory. Rapa Nui Journal: 21-2 85-97.
- Hunt, Terry.L. (2006). Rethinking the Fall of Easter Island: New evidence points to an alternative explanation for a civilization's collapse." American Scientist 94:412-419.
- Lynch John, (1998) Pacific languages, an introduction, University of Hawai'i Press.
- Make Alfred and Ghasarian Christian (2008) Légendes de Rapa, Edition Au vent des îles.
- Michel, Albin.(1993) Itinéraire spirituel : Ile de Pâques, à la rencontre du Mana, Publisher A. Michel.
- Mieth Andreas and Bork Hans-Rudolf (2010) Humans, climate or introduced rats-which is to blame for the woodland destruction on prehistoric Rapa Nui (Easter Island)?, Journal of Archaeological Science 37. 417-426.
- Ojeda Charlin Carlos.(1947) Geo-etimología de la Isla de Pascua, Instituto Geográfico Militar, Santiago de Chile.
- Tryon, Darrell T. (1995) Comparative Austronesian Dictionary, An introduction to Austronesian studies, Part 2. Mouton de Gruyter.
- Whistler W. Arthur (2009) Plants of the Canoe People: An Ethnobotanical voyage through Polynesia, National tropical botanical garden.